『古代アメリカ』2, 1999, pp. 59-82

＜研究ノート＞

先コロンブス期のマナグア湖畔

ーチョロテガの移住にかんする諸問題ー

長谷川悦夫
（日本学術振興会特別研究員）

【キーワード】
ニカラグア、ニコヤ文化圏、移住、チョロテガ、パパガヨ・ポリクローム
Nicaragua, Greater Nicoya, Migration, the Chorotega, Papagayo Polychrome

---

1．はじめに:ニカラグア考古学事情概観

中米ニカラグア共和国の先コロンブス期の遺跡・遺物に関心が払われるようになったのは意外と早い時期である。19世紀、スクワイヤーが自然、民俗、考古学遺跡の観察を含めた優れた旅行記［Squier　1860］を残し、今世紀初めにはロスロップがコスタリカ・ニカラグアで調査を行い、主として土器を扱った大著の報告書［Lothrop 1926］が刊行されている。また、マナグア湖畔で発見されたアカワリンカ足跡遺跡は中央アメリカにおける古期人類の痕跡として注目された。

しかしながら、1930年代から1970年代にかけてのソモサ独裁政権下での考古学調査・研究は、今日でも重要性を持つ成果が散見されるものの概して低調であり、北のメソアメリカ、特にマヤ地域の考古学研究の進展と比べたとき隔絶した感がある。1972年のマナグア大地震から、革命戦争を経て、80年代の内戦が終結するまでの間は、中米一豊かだといわれたこの国が荒廃し、最貧国へと転落する過程である。少数の研究者が困難な状況の中で敬意を払うに値する努力を続けていたが、このような時代に考古学調査が大きく進展しようはずもなかった。

1990年の選挙後の親米政権の樹立以来、国内の状況も安定し、外国からの援助や投資も増え、経済も復興の兆しが見えている。これにともない考古学調査の件数も増加中であるが、ニカラグア政府の財政状況は依然厳しく、そのほとんどを外国の研究者の持ち込む資金に頼っているのが現状である。また調査地域もいわゆるニコヤ文化圏(Greater　Nicoya:ニカラグア太平洋岸からコスタリカ西北部のグアナカステ県を含む：図１)を構成する太平洋岸に限られており、内陸やカリブ海岸の調査は皆無に等しい。本稿もこのニコヤ文化圏内の一地域としてのマナグア湖畔を扱ったものである。

筆者は1997年4月から10月まで、国際交流基金派遣専門家としてニカラグア国立博物館に派遣され、同博物館の嘱託調査員として４件の発掘調査に携わった。本稿ではこのうちのひとつマナグア市所在のティコモ遺跡(Sitio　Ticomo)の発掘調査の結果とマナグア市内の他の発掘調査の結果の比較を通してのセトゥルメント・パターンの変化という問題から出発し、チョロテガのニカラグア太平洋岸への移住にかんする問題を論じたい。

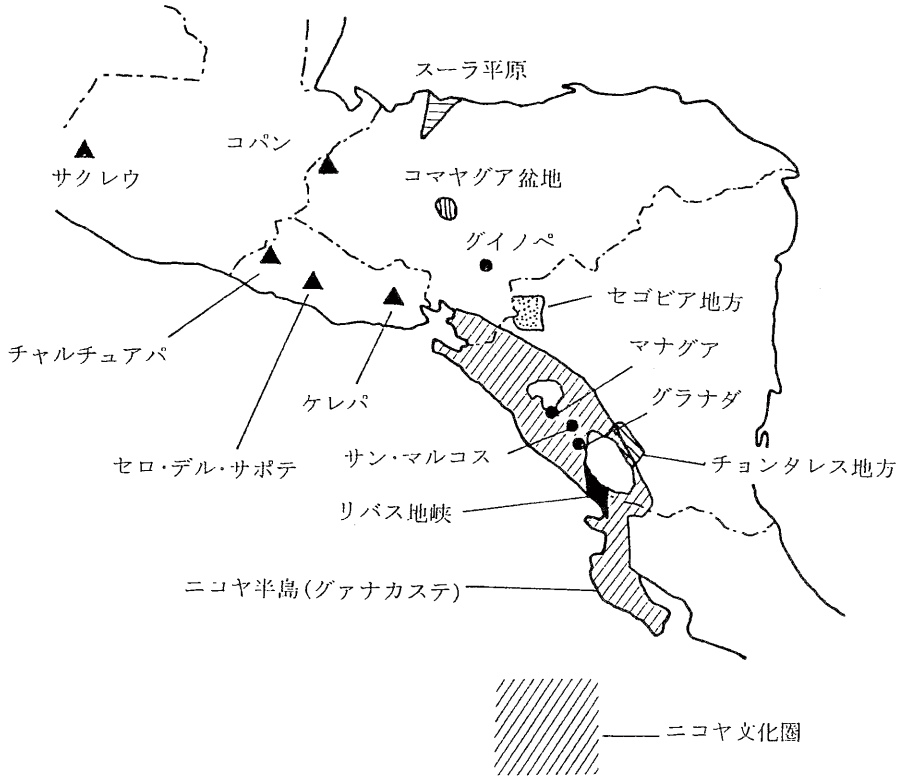

図1　メソアメリカ東南部とニカラグア

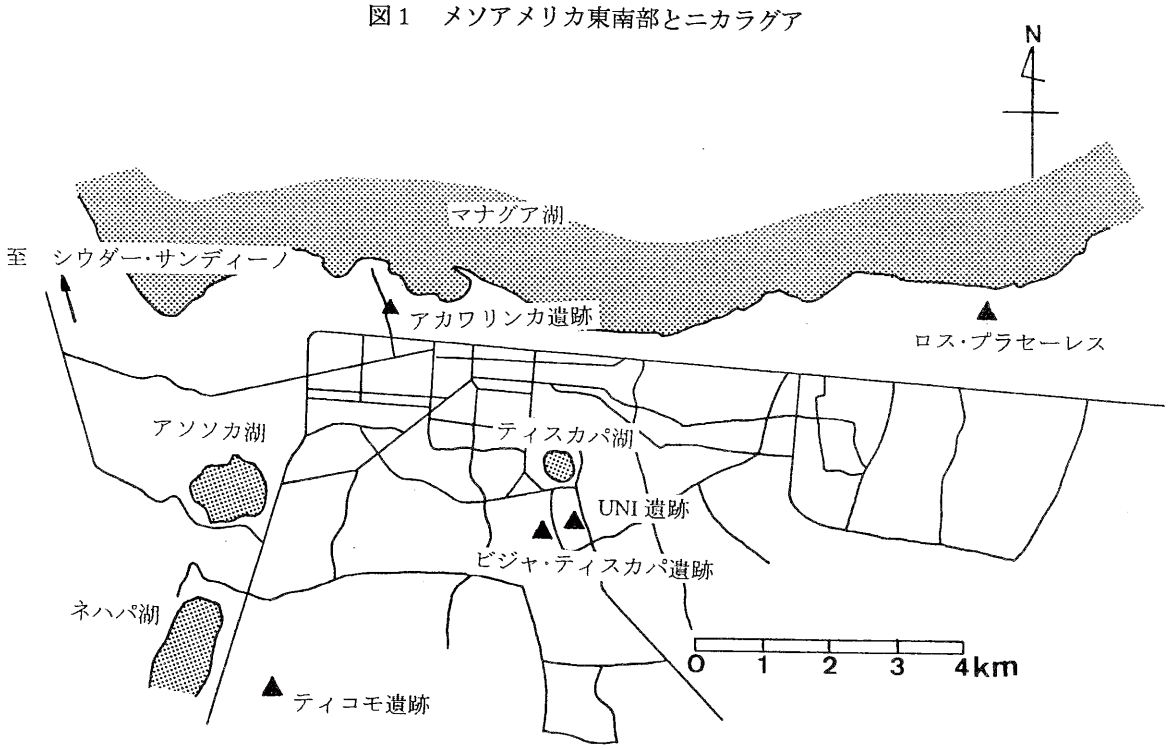

図2　マナグア市内の遺跡

2．ティコモ遺跡の発掘調査

(1)調査の概要

ティコモ遺跡発掘調査は1995年以来合衆国コロラド大学とニカラグア文化庁・国立博物館の提携によって続けられているマナグア首都考古学プロジェクト(Proyecto Arqueológico de la Zona Metropolitana de Managua)の一環として行われた。当プロジェクトは経済復興にともない開発工事が増加中の首都マナグア市において、破壊にひんした遺跡の緊急発掘とデータの回収を行っている。1995年と1996年の調査結果は既に報告書として出版されている［Lange 1995, 1996］。しかし、これらの報告書は調査された各遺跡についてのデータを提示するのみで、それらを総合した解釈はなんらなされていない。

ティコモ遺跡はマナグア市の北東部、ネハパ湖(Laguna de Nejapa)の約1.3km南に位置し、海抜標高は200-210m、ネハパ湖に向かってなだらかに傾斜した場所である(図２)。住宅建設の基礎工事で土器片、石器片が出土し、調査の実施が決められた。遺物の表面採集と2m×2mの試掘坑の発掘を行い、筆者がこれらの調査を担当した。以下この調査の結果を要約して記す。

表面採集では約１haの広い地域に遺物の散乱を確認し、350の土器片、11の石器片を回収。発掘では地表下約70cmに現れる、現地でタルペタテ(talpetate)と呼ばれる凝灰岩層[1]までの深さの層から1954点の土器片と50点の石器片を回収した。この凝灰岩層の直上の層から瓦が出土したために、当遺跡は少なくとも試掘坑を入れた周辺では撹乱されていることがわかった。特筆すべきものとして、試掘坑のひとつで、この凝灰岩層を人為的に楕円形に彫り込んで石を詰めた遺構が検出された(図３)。深さ50cmまで石が詰められており、発掘時の観察では石の詰め方にはいかなるパターンも認識されなかった。この集石遺構の下からは保存状態の良い炭が出土した。石に混じってと、集石の下の層から土器も３点出土している。このような遺構の類例は周辺地域で現在までのところ報告されておらず、その性格はまったく不明である。年代に関しては出土土器からバガセス期からサポア期への移行時(現行の編年ではAD800前後)と推定される。もう一方の試掘坑でもやはり凝灰岩層を掘りこんだ円形の穴が見つかっている。この掘り込みからは出土遺物はなかった。

(2)土器分析の結果

表面採集で回収された350点の土器片のうち25点、発掘で回収された1954点のうち97点が既知の土器タイプとして同定され、分類された。この調査に限らず、同定される土器片の数が総量に占める割合がすくないのは、当地域では文様のない粗製土器の分類・編年が現在まで全く行われていないためである。表面採集では全ての土器片を回収せず、目に付いた土器のみを集めた。このため表採資料にはバイアスが多く含まれると思われる。よってここでは発掘で回収された土器を主に検討し、表採資料は補助的に用いることにする。

前述のように試掘坑１では後世の撹乱が確認されたため、ここでは層位ごとの記述ではなく、全体をひとまとめにして論じる。

年代にかんしては、テンピスケ期(Tempisque Period, 500BC-AD300)からスペイン植民期にいたるオメテペ期(Ometepe Period, AD1350-1550)までの土器が確認されたが、本稿での主題と関連するバガセス期(Bagaces Period, AD300-800)とサポア期(Sapoa Period, AD800-1350)のみ取り上げて記す。

後述するが、筆者はバガセス期とサポア期の境目の年代がAD800であるとは思わない。AD950まで下ると考えている。しかし、ここでは混乱を避けるためにあえて当プロジェクトで採用されてい

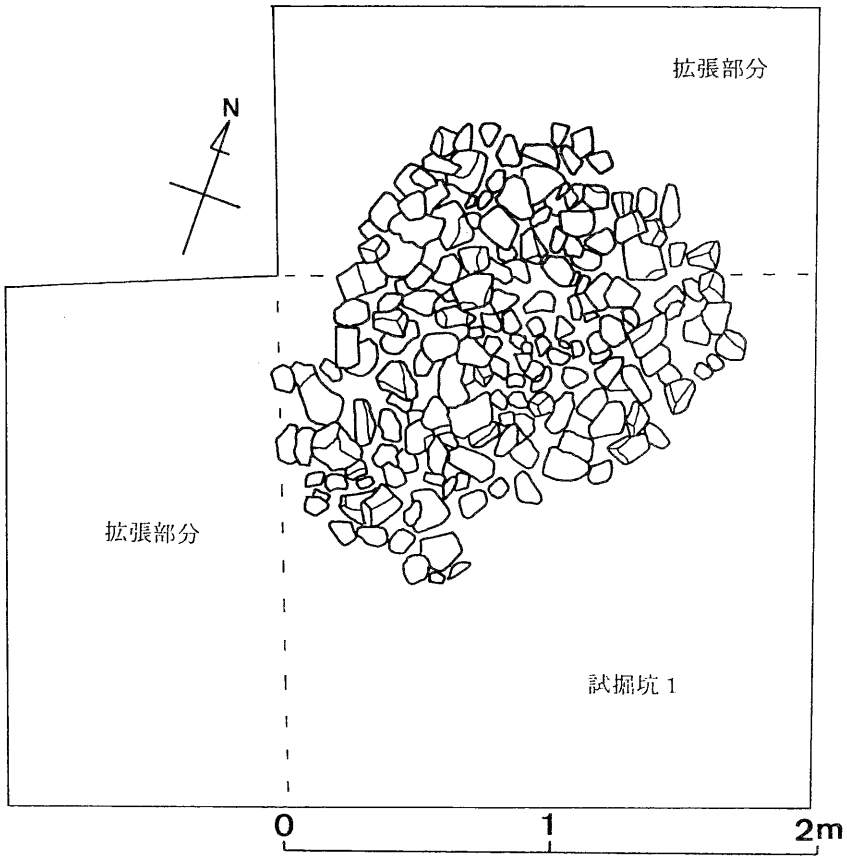

図 3　ティコモ遺跡試掘坑 1、集石遺構

るAD800という年代を用いて記述する。

・バガセス期(Bagaces Period, AD300-800)

土器の出土量が急速に増加する。端的にいえば、ティコモ遺跡ではこの時代の土器の出土量が圧倒的であり、同遺跡を特徴づけるものとなっている(表１)。レオン刺突文土器(図４、l,m)が圧倒的に多い。発掘で50点出土しており、これだけで同定された土器片の半分以上を占める。この土器はトウガラシなどを挽くための実用土器と推定されており、ニコヤ文化圏に広く分布しているが、特にニカラグアで多いようである［Abel-Vidor et.al. 1990］。表採でも同定された土器片25点のうちの16点をこれが占める。このほかに多い土器として、ボルゴーニャ刻文土器(図４、o)が16点、トーラ・トリクローム(図４、j,k)が８点出土している。前者はマナグアとグラナダでのみ発見されている土器タイプであり、ローカルなものと思われる。後者はニコヤ文化圏に広く見られる。

これらのほかに、地域間交流を示唆すると思われる土器も出土している。ウルア・ポリクローム(図４、n)は、ホンデュラスのスーラ平原から中部のコマヤグア盆地にかけて大量に出土する土器である。スラコ・オレンジは、同じくホンデュラスのエル・カホン(El Cajon)で確立された土器タイプであり、搬入品か模倣品かは別としてグイノペ(Guinope)の黒曜石とともにホンデュラス中央部・東部と

表１：ティコモ遺跡土器分析結果

<発掘（試掘坑1、2)>

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ウスルタン	2	0.1
(sub-total)	2	0.1
バガセス期		
トラ・トリクローム	9	0.46
チャベス	2	0.1
レオン刺突文土器	50	2.59
ボルゴーニヤ	16	0.82
スラコ・オレンジ	5	0.26
ウルア・ポリクローム	3	0.15
(sub-total)	85	4.35
サボア期		
パパガヨ.ポリクローム	3	0.15
サカサ刷毛目文土器	2	0.1
(Sub-total)	5	0.26
オメテペ期		
バジェホ・ポリクローム	3	0.15
コンボ	2	0.1
(sub-total)	5	0.26
total 1	97	4.96
(同定できた土器の総数)		
total 2（総出土量）	1954	100

<表面採集>

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ウスルタン	1	0.33
(sub-total)	1	0.33
パガセス期		
チャベス	2	0.67
レオン刺突文土器	16	5.33
ボルゴーニヤ	2	0.67
スラコ・オレンジ	1	0.33
ウルア・ポリクローム	1	0.33
(sub-total)	22	7.33
サボア期		
サカサ刷毛目文土器	2	0.67
(sub-total)	2	0.67
total 1	25	8.33
(同定できた土器の総数)		
total 2（総出土量）	350	100

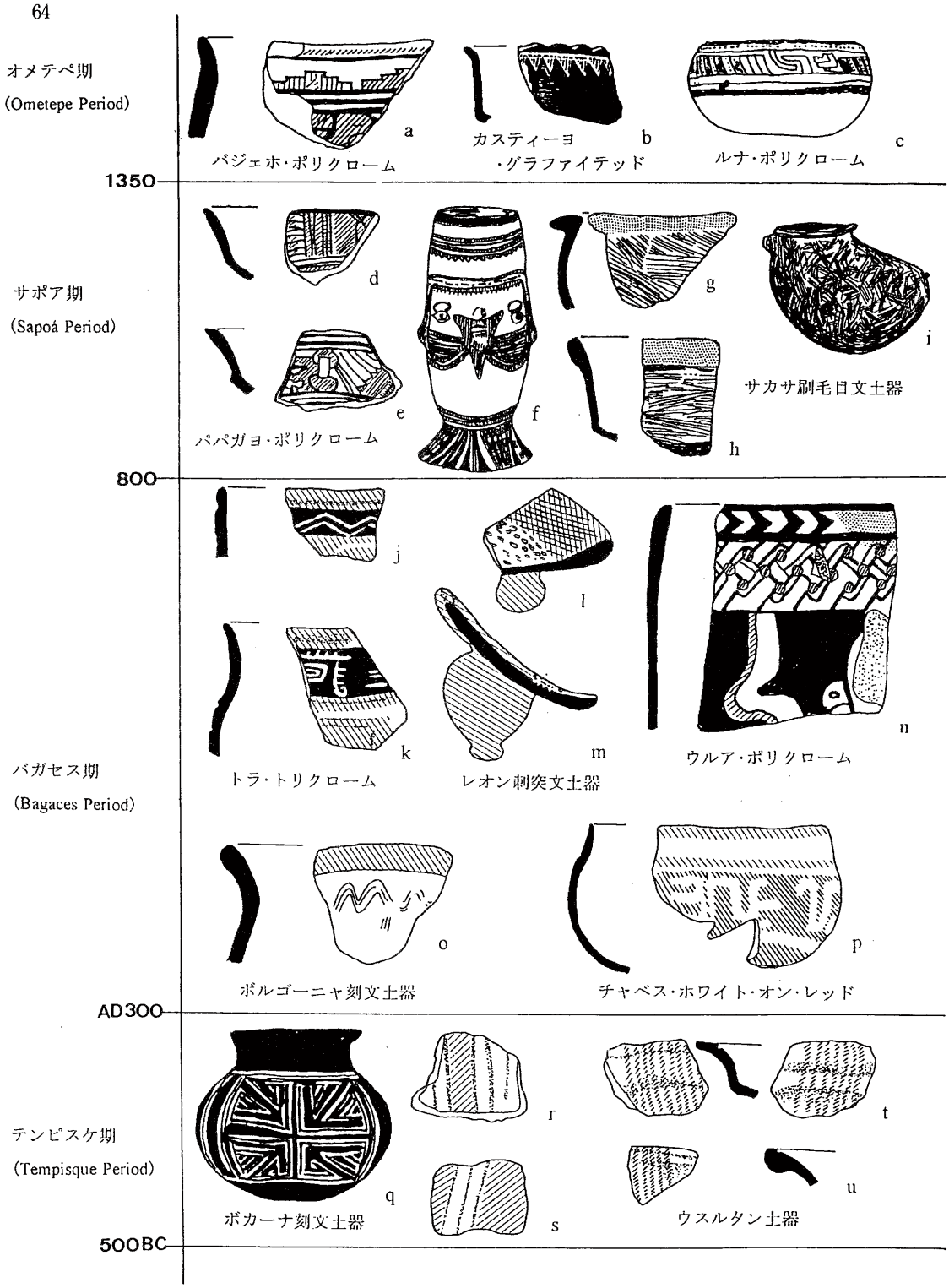

図4　ニカラグア土器編年と土器タイプ類例
[図版出典 a, b, d, e, g, h, j-m, p, r-u: Healy 1980 より; c, f, i, q: Lothrop 1926 より;
n: ホンデュラス、トラベシーア遺跡表採品（長谷川実測）;
o: ティコモ遺跡出土品（長谷川実測）]

ニカラグア太平洋岸の交流の証拠としてあげられることが多い。ティコモ遺跡の発掘ではウルア・ポリクロームが3点とスラコ・オレンジが5点出土している。

前述のようにこの時期の土器の出土量はきわめて多く、発掘で出土し、タイプが同定された土器片の97点のうち85点、表採では25点のうち22点を占める。

試掘坑1の集石遺構の詰め石に混じって、ウルア・ポリクローム1点と白色スリップを施した土器が1点出土している。この白色スリップの土器片をサポア期に入って現れる土器製作技法とみなせば、集石遺構の年代についてはバガセス期の終わり、または次のサポア期の始まりと考えられる。

・サポア期(Sapoa Period, AD800-1350)

土器の出土量は急激に減少する(表1)。パパガヨ・ポリクローム(図4、d、e、f)が3点とサカサ刷毛目文土器(図4g、h、i)が2点発掘で出土するのみである。パパガヨ・ポリクロームは、いわゆるニコヤ・ポリクロームとして一括される白色スリップの上に文様の描かれる土器タイプの一つでニコヤ文化圏では広範に出土する。もともとこの地域が考古学的に脚光を浴びることになったひとつの理由は、この種の土器の多さからである。またサカサ刷毛目文土器も実用土器兼埋葬用の甕棺で出土量が多く、表面全体に刷毛目があることによる同定しやすかからも、ニカラグア太平洋岸では出土品以外でも個人や博物館のコレクションに多くみることができる。にもかかわらず双方ともこの遺跡では僅かな量が出土するにとどまる。表採土器の中では、この時期のものとしてサカサ刷毛目文土器が2点あるにすぎない。

(3)石器分析の結果

回収された資料が少なく、見るべきものはない。数量的には材質としての黒曜石の多さ(26点)があげられるが、いずれも小さな剥片で、この材質の割れやすさから考えると、単なる数量比較が実態を反映するとは思えない。これら26の黒曜石の剥片のうち、原面をもつものが15点、剥離面だけのものが11点である。筆者の観察した限り、これらの剥片のうちプリズマティック・ブレードの破片であると識別できるものはない。

その他には玄武岩の石斧が4点出土しているのが目を引く。これらの石斧の年代を決定することはできないが、ヒーリーのリバス地峡（Isthmus of Rivas: コスタリカとの国境近く）での研究によれば、石斧は、AD300-800の彩色土器期前期（Early Polychrome Period：本稿でいうバガセス期）に急激に多くなり、この時期の開墾と農耕地の増加を反映していると考えられる［Healy 1980］。

3．ティコモ遺跡と他の遺跡の比較

ティコモ遺跡では、テンピスケ期にすでに人間活動の痕跡は見られるものの、それは非常に希薄である。上述のようにバガセス期には、土器の量が増加する。この時期の土器タイプの出土量の大部分を占めるレオン刺突文土器、ボルゴーニャ刻文土器ともに実用土器であり、このことからティコモ遺跡にはバガセス期に多くの人口の居住があったと推測できる。しかしながらサポア期に入り、突然土器が少なくなり、居住が放棄されたと考えられる。凝灰岩層を掘り込んだ正体不明の二つの遺構はこのころのものである。オメテペ期でも、土器の出土は僅かであり、この時期がバガセス期の半分以下の時間幅しかもっていないことを考慮に入れても、ティコモ遺跡における居住の衰退、あるいは断絶が回復しなかったことを物語っているとみてよい。

以下ではこのように明らかになったティコモ遺跡における推移を、マナグア首都考古学プロジェ

クトで調査された他の遺跡と比較する。各遺跡についての記述は出土した土器の総量を中心とする[2)]。ここでも、問題となるバガセス期とサポア期以外の時期については、簡単に触れるにとどめる。

・アカワリンカ遺跡(Acahualinca)

マナグア湖畔に所在し、有名なアカワリンカ足跡(古期)があるが、ここで問題にするのは上層のテンピスケ期以降の層から出土した土器である。ゴンサレスが試掘を行い、7700点の土器片を回収、分析結果を報告している［González 1995; Figura 5.2］。ゴンサレスの提出した表を見ると、この遺跡とティコモ遺跡の間に驚くほどの類似があることがわかる。双方の遺跡で、ボカーナ刻文土器(図４、q､r､s)などのテンピスケ期の土器はまれである。バガセス期には土器の出土量が急増する。レオン刺突文土器、ボルゴーニャ刻文土器は両遺跡で最も多い土器タイプであり、この二つで出土土器の大部分を占める。その他のバガセス期の土器もウルア・ポリクローム、スラコ・オレンジといった、在地のものではなくホンデュラス系と見られる土器に至るまで、すべて共通している(表２)。また、サポア期に入って土器の出土量が激減するパターンも一致している。アカワリンカ遺跡は、ティコモ遺跡と同じような推移をたどったことが分かる。

表２：アカワリンカ土器分析結果

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ウスルタン	1	0.01
(sub-total)	1	0.01
パガセス期		
トラ・トリクローム	22	0.28
レオン刺突文土器	231	2.97
チャベス	126	1.62
ボルゴーニヤ	174	2.23
ウルア・ポリクローム	10	0.12
スラコ・オレンジ	34	0.43
(sub-total)	597	7.65
サポア期		
パパガヨ・ポリクローム	10	0.12
サカサ刷毛目文土器	12	0.15
(sub-total)	22	0.27
オメテペ期		
カスティージョ	5	0.06
バジェホ・ポリクローム	5	0.06
マナグア・ポリクローム	11	0.14
(sub-total)	21	0.26
total 1	641	8.19
(同定できた土器の総数)		
total 2 (総出土量)	7770	100

(González 1995 より作成)

表３：UN1遺跡土器分析結果

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ボカーナ刻文土器	5	0.28
ロサレス・グラファイト	1	0.06
ウスルタン	4	0.22
(sub-total)	10	0.56
バガセス期		
スラコ・オレンジ	1	0.06
レオン刺突文土器	9	0.5
ボルゴーニヤ	1	0.06
(sub-total)	11	0.62
サポア期		
サカサ刷毛目文土器	92	5.13
パパガヨ・ポリクローム	46	2.56
パタキ・ポリクローム	4	0.22
(sub-total)	142	7.91
オメテペ期		
コンボ	2	0.11
バジェホ・ポリクローム	46	2.56
オメテペ・ポリクローム	3	0.17
(sub-total)	51	2.84
total 1	214	11.93
(同定できた土器の総数)		
total 2 (総出土量)	1794	100

(Bargnisi et. al. 1996 より)

・ＵＮＩ遺跡(Sitio UNI)

マナグア湖の南３km、湖畔の平野から丘陵を上がったティスカパ湖(Laguna de Tiscapa)に程近い国立工業大学(Universidad Nacional de Ingeniería)構内で調査が行われた。１年目の調査では遺物の表面採集が行われ、回収された土器はサポア期とオメテペ期のものだけである［Pichardo y Zambrana 1995］。２年目の発掘でも、1794点の土器が回収されたが、サポア期のものが142点、オメテペ期のものが51点に対してバガセス期のものは14点にすぎない(表３、Bargnesi, Dirksen, y Hartman 1996 より)。

ＵＮＩにおいてはバガセス期の人間活動の痕跡は希薄であり、サポア期に入って活性化する。ティコモ遺跡、アカワリンカ遺跡とは全く逆の傾向が読みとれる。

・ロス･プラセーレス遺跡(Los Placeres)

マナグア湖畔にある。この遺跡でもＵＮＩ遺跡と同じパターンが見られる(表４)。発掘調査では

表４：ロス･プラセーレス土器分析結果

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ウスルタン	1	0.02
(sub-total)	1	0.02
パガセス期		
トラ･トリクローム	10	0.2
レオン刺突文土器	23	0.5
ウルア･ポリクローム	2	0.04
ボルゴーニヤ	1	0.02
(sub-total)	38	0.8
サボア期		
パパガヨ･ポリクローム	143	2.95
サカサ刷毛目文土器	598	12.3
パタキ･ポリクローム	9	0.19
(sub-total)	750	15.44
オメテペ期		
マデイラ･ポリクローム	1	0.02
バジェホ･ポリクローム	28	0.58
カステォーヨ･グラファイテット	8	0.16
ムリージョ	6	0.12
コンボ	32	0.7
オメテペ･ポリクローム	24	0.5
ルナ･ポリクローム	8	0.16
バンダ	3	0.06
ブラマデロ	1	0.02
(sub-total)	111	2.32
total 1	900	18.58
(同定できた土器の総数)		
total 2 (総出土量)	4846	100

(Stauber 1996 より作成)

バガセス期の土器が出土したが、少量であり、サポア期にはいって土器は急増する［Stauber 1996］。興味深いのは、この遺跡でもティコモ遺跡とおなじようなタルペタテ(凝灰岩層)を掘り込んだ遺構が見つかっていることである。調査者はこの遺構をサポア期、あるいはそれより後の時代としている。

・シウダー・サンディーノ遺跡(Ciudad Sandino)

この遺跡はマナグア市街地から西へパン・アメリカン・ハイウェーをレオンに向かって20kmにある。3607点の土器が回収された［Keller, Lawson, y Sievers 1996］。テンピスケ期からオメテペ期までの土器が出土しているが、上記の遺跡と異なり、各時期の土器の量には大きな差はない。しかし、この遺跡においては、わずか81点の土器が、何らかのタイプに同定されているのみである。

表５：バリオ・ラ・クルス土器分析結果

	数量
テンピスケ期	
ボカーナ刻文土器	10
ウスルタン	1
パルマス2	
(sub-total)	13
パガセス期	
トラ・トリクローム	5
ボルゴーニヤ	2
レオン刺突文土器	26
エルマーノス	15
チャベス	8
ルーレッテッド	1
スラコ・オレンジ	1
モンタ	12
(sub-total)	70
サポア期	
パパガヨ・ポリクローム	12
アシエンティーヨ	1
ラス・ベガス・ポリクローム	1
サカサ刷毛目文土器	23
(sub-total)	37
total 1	120
(同定できた土器の総数)	
total 2 (総出土量)	475

(Brown 1995 より作成)

表６：サン・ホセ・デ・ロブレト遺跡土器分析結果

	数量	パーセンテージ
テンピスケ期		
ボカーナ刻文土器	4	2.58
ウスルタン	1	0.65
(sub-total)	5	3.23
パガセス期		
レオン刺突文土器	1	0.65
チャベス	1	0.65
ボルゴーニヤ	1	0.65
(sub-total)	3	1.95
サポア期		
ディリリオ	2	1.29
パパガヨ・ポリクローム	47	30.32
サカサ刷毛目文土器	42	27.1
(sub-total)	91	58.71
オメテペ期		
パジェホ・ポリクローム	20	12.9
(sub-total)	20	12.9

(Piperata 他 1995より作成)

・ビジャ・ティスカパ遺跡(Villa Tiscapa)

1995年、ニコヤ文化圏で最も古いオロシ期(2000-500BC)と命名された時代の土器群がこの遺跡で発見されている［Espinoza 1995］。

1996年の発掘調査［Brown, Kreig y Wilmot 1996］では、オロシ期につづくテンピスケ期にも人間活動の痕跡は濃厚であることが明らかになった。ニコヤ文化圏でこの時期に特徴的な土器タイプのほかに400点以上のウスルタン土器(図４、t､u)が出土している。この時期の建物と見られる遺構も発見されており、居住があったことは確実である。

ビジャ・ティスカパでは、続くバガセス期、サポア期の土器も出土しているが、それぞれ16片、23片と少数である。土器の出土量、遺構から判断してこの遺跡では最盛期はテンピスケ期であったと考えられる。

・カラソ県、サン・マルコス市の遺跡(Sites in San Marcos, Carazo)

サン・マルコス市はマナグアの南方、約35kmにあり、標高は540mである。この地域はマナグア湖畔とはやや隔たってはいるが、首都考古学プロジェクトの一環として踏査が行われている。資料は表採品のみで比較の対象としては難点があるが、興味深いデータなので紹介したい。

調査されたのはバリオ・ラ・クルス遺跡(Barrio La Cruz)と、サン・ホセ・ロブレト遺跡(San José Robleto)である。双方とも、サン・マルコス市の北部にあり、比較的近接した位置(１kmあまり)にある。

バリオ・ラ・クルス遺跡の表採土器片159点のうち、バガセス期のものは74点、サポア期のものは37点であり［Brown 1995］、ティコモ遺跡に見られるような劇的な変化はないが、やはりサポア期に入っての衰退が見られる(表５)。

一方、サン・ホセ・デ・ロブレト遺跡(表６)では、155点の表採土器片のうちバガセス期のものは４点にとどまり、サポア期のものは89点である［Piperata 1995］。もちろん新しい時代の土器ほど地表面に見えやすいということを考慮に入れなければならないが、近接した２つの遺跡で全く逆のパターンが見られるというのは注意を払うに値する。

４．エスノヒストリー

ところで、16世紀にスペイン人の目撃したマナグア湖畔の状況を簡単に見てみる。征服時には、マナグア湖畔をふくむニカラグア太平洋岸北部とニコヤ半島(Nicoya Peninsula)にはオトマンゲ語族のチョロテガが住んでいたことが分かっており、大規模な人口を擁し、いわゆる首長国段階の社会を形成していた。1528年から29年にニカラグアに滞在したオビエドは「チョロテガ語の話されているマナグアを訪れたが、それはまさに美しく、人の多い町であった。･･･しかし町の主体部というものはなく、互いに間隔を置いたバリオや広場があった。･･･これらマナグアの町々は、湖を取り囲むループのようであり、いずれも３レグアを超えることはなかったが、その繁栄時には１万の弓矢を持つインディオと４万の住民を擁していた。･･･」［Oviedo cited by Esgueva 1996:18］と述べる。

ニカラグア太平洋岸の住民の起源の地について、クロニスタたちは移住の伝承を採録している。いろいろなバージョンがあるが、そのうちでも最も詳しく、移住の年代にも言及している唯一のものであるトルケマーダの記述［Torquemada cited by Esgueva 1996:26-28］から引用する。

「土地の人々(los naturales)、その多くは老人であるが、彼らが話すところによると、ニカラグアとニコヤ(またの名をマンゲ)のインディオは、古代においては、現在はメキシコのゴベルナシオン

にある無人の地であるソコヌスコに居住地をもっていた。ニコヤの人々はチョロルテカ(Choroltecas)の子孫である。彼らは山の方、内陸の地に住んでいて、メキシコのアナワクの子孫であるニカラグアは南の海(太平洋)の海岸に住んでいた。両方とも多くの人口を持つ集団であった。彼らの言うところによるとそれは老人の年齢、寿命の7、8回も昔のことである。・・・」

この記述の中に出てくるニカラグアとはナワ語族のニカラオのことであり、征服当時はニカラグア太平洋岸北部とニコヤ半島のチョロテガに挟まれて、リバス地峡に居住していた。ニコヤというのがチョロテガのことである。実はこの記述はトルケマーダが、もっと古い一次資料をもとにしていると思われ、上記の文章ではニカラオとチョロテガが同時に移住したようにも読めるが、他の個所ではチョロテガのことを「先に行った人々」(los de Nicoya, que iban en la delantera)と書いている。また、「モクテスマの軍隊」という明らかにポチテカのことを述べた部分で、ニカラオにかんする記述と全く同じ「先住民に荷役を頼んで欺き、彼らが眠っている間に皆殺しにして土地を占拠した」という話が出てきて、いくつもの移住の波をひとまとめに扱っているふしがある。

5．考察

(1)先コロンブス期のマナグア湖畔

オロシ期、ティスカパ期にくらべて、バガセス期の人間活動の痕跡は広範囲にみられ、おそらくは生産性や人口が増大したであろう。出土量の多寡を別にすれば、首都考古学プロジェクトで調査された遺跡の全てからこの時代の土器が出土しているし、ティコモ遺跡、アカワリンカ遺跡ではその出土量は大きく、大規模な居住を想定するに十分である。しかしながらこの時代に繁栄したこれら二つの遺跡はサポア期に入って居住が断絶したと考えられる。それにかわって、それまでわずかな土器しか出土しなかったＵＮＩ、ロス・プラセーレスでは人間活動の痕跡が濃厚になる。この変化を生態的な環境や生業形態の変化で説明することは難しい。アカワリンカ遺跡もロス・プラセーレス遺跡もマナグア湖の水辺にある(図2)。これらの遺跡のうち一方は衰退し、他方は繁栄するのである。ティコモ遺跡とＵＮＩ、サン・マルコスの二つの遺跡についても同様である。おなじような環境下にありながら、一方は衰退し、他方は繁栄する。

前章で取り上げたチョロテガの移住の伝承について、考古学者たちは早くからそれが実際に起こったことであり、AD800年前後の出来事であると考えてきた［Healy 1980:336-337］。根拠となるのはこの時期に現れるパパガヨ・ポリクロームなどの白のスリップを施した土器群の装飾モチーフに、メキシコ的、あるいはマヤ的なものが見られることによる。具体的には「羽毛のあるヘビ」などの神格、ジャガー、階段状の文様といった図像である。首都考古学プロジェクトの調査により明らかになったバガセス期からサポア期への移行時にマナグア湖畔に見られるいくつかの遺跡の断絶と他の遺跡の勃興という事実は、年代にかんしてはともかく、移住があったという点については、この推論が正しいことを裏書きしていると思われる。このセトゥルメント・パターンの変化は外部からの侵入者によって引き起こされたものである。当然のことかもしれないが、チョロテガの移住はけっして平和的なプロセスのうちに起こったものではなく、マナグア湖畔の景観を一変してしまうような社会的混乱をともなっていた。

続くサポア期でも遺物の出土は調査された遺跡の全てで確認されており、広範な人間活動があったことが分かる。しかし、この時代に繁栄したのは、前時代とは別の2つの遺跡であり、その住民は先住民を放逐し、パパガヨ・ポリクロームなどの新しいタイプの土器を製作した北からの侵入者であったと考えられる。

首都考古学プロジェクトで発掘され、詳細な報告がなされているのが5遺跡であり、今回のティコモ遺跡の調査結果を加えても6遺跡にすぎない。そのうちの2遺跡がバガセス期に繁栄してサポア期に放棄され、2遺跡では逆のパターンが見られることをもって、セトゥルメント・パターンを議論するのは、資料が少なすぎて時期尚早という感もある。しかし、その他の2遺跡では、いずれもバガセス期からサポア期にかけての一貫した居住をうかがわせる量の土器の出土はない。また、他地域でもマナグア湖畔と同じような現象が見られることに注意しなければならない。ひとつは既に述べたサン・マルコス市の2遺跡である。もうひとつはグラナダ地方である。

ニカラグア湖岸北西部のグラナダ地方(図1)でも、セトゥルメント・パターンの変化が報告されている［Salgado 1996］。前時代には湖からは上がった斜面に集落が営まれていたのに対してサポア期に入りはじめて湖の岸辺や島に居住があらわれる。バガセス期に繁栄していた2つのセンターが衰退し、かわって6つの遺跡に人間活動の痕跡が濃厚となる。土器も前時代のものと比べてスリップ、表面調整、装飾モチーフ、胎土すべてに違いが見られ、石器ではプリズマティック・ブレード[3]が増加する。報告者のS.サルガードもこの現象をメソアメリカからの外部集団の侵入と関連付けている。

マナグア湖畔、サン・マルコス市の二つの遺跡とグラナダ地方の調査結果をみれば、この現象がマナグア湖畔にとどまらず、もっと広範囲に起こっていたことが窺われる。

(2)移住に関する諸問題

以上首都考古学プロジェクトの成果から復元された、マナグア湖畔の先コロンブス期の推移、特にバガセス期からサポア期の移行期のセトゥルメント・パターンの変化に焦点を置いてみてきた。

結論としては、従来クロニスタによって採集された伝承とパパガヨ・ポリクロームなどの新しい土器タイプの出現によって推測されてきたチョロテガのニカラグア太平洋岸地方への移住というテーマに、マナグア湖畔とサン・マルコス市におけるセトゥルメント・パターンの変化というもうひとつの傍証を付け加えたに過ぎない。しかし、このようにひとつひとつ根拠を重ねてゆくことによって、「考古学は遺跡や遺物の変化に対して"移住"という言葉を安易に使いすぎる」という批判に答えられるようになるのではないかと思う。

もちろん、「移住があった」という命題についていくら根拠を積み上げていっても、「重要なのは"移住があった"という事実ではなくて、そのプロセスとメカニズムである」というもっと根本的な批判［Adams et.al. 1978］に対しては答えられない。残念ながら本稿でも移住の結果にのみ言及し、その原因や移住者がどのように社会を形成したかという問題については踏み込むことができていない。にもかかわらず、このような資料を紹介したのは、近年ニカラグアを含む中央アメリカ南部の考古学、そしてさらには中間領域の考古学で、「移住」を含む地域外からの「影響」(侵略、移住、交易、交換による文化要素の伝播)が過小評価されているのではないかと思うからである。このような流れの背景には、かつて主流を占めたストーン［Stone 1972］、コウ［Coe 1960］、レイスラップ［Lathrap 1977］などの中央アメリカ南部、あるいは中間領域全体の社会発展をメソアメリカや南米からの影響で説明する学説に対する反動、生態環境とそれへの適応による社会発展を重視するプロセス考古学において、ある地域を「黒枠で囲って」でひとつの閉鎖系を想定する必要性［穴沢 1985:243-244］、中央アメリカ南部が多数の小さな国に別れていること、ニカラグアとエル・サルバドルで政治的に不安定な状態が続いたことからくる研究交流の困難さがあるだろう。中央アメリカ南部の各地域の社会が「比較的孤立して」それぞれの地域の環境に適応し、独自の多様性ある文化を築いたとする論者たち［Lange 1992b、Cooke and Ranere 1992］も、メソアメリカや南米の影響を全

く排除しているわけではない。だとすれば、たとえそれらが隣接地域の社会の間の接触をとおして広まったと仮定しても、モノやアイデア自体は動かないのであるから、最低限の人の移動は想定しなければならない。

筆者は決して、チャイルドの時代のように特定の遺跡・遺物の型式の組み合わせによって「民族」を規定し、その分布をもって居住地を決定する考古学［Childe 1956］に回帰しようとしているのではないし、ストーンの伝播説を復興しようとしているのでもないが、内的発展を過度に重視し、外部の影響を過小評価することによって、中央アメリカ南部の考古学が断片化しつつあるのではないかと危惧する。外部の影響と内的発展は二項対立的に捉えられるものではないから、外部の影響を受けつついかに地域社会がそれを自らの社会に取り込んでいったかを追究しなければならない［長谷川 1996］。筆者と同じ立場を取るS.サルガードから引用する「中央アメリカの先コロンブス期の社会間交流は多くの研究によって示されてきた。にもかかわらず、研究者たちは、いまだにその重要性、強度、方向について一致を見ていない。あるものは、汎地域的な交流のプロセスは在地社会にシステミックな効果をもたらしたものとみるが、他のものたちはローカルな発展力(local dynamics)にとっては、それらは取るに足らないものだったという立場を堅持している」［Salgado 1996: 282］。

次章では、メソアメリカの動きとニカラグア諸地域の社会の変化が同時期である可能性を検討し、「移住」のプロセスとメカニズムを明らかにするためのひとつの方向性を提示する。

6．移住の年代の再検討

(1)AD800以降のメソアメリカとニカラグア

AD800-1000年というのは、マヤ低地の諸遺跡の衰退と崩壊、メキシコ高原におけるトルテカの勃興というメソアメリカ激動の時代であった。古典期マヤの「崩壊」については、従来の見方が修正されてきており、極論では崩壊はなかったという意見も提示されているが、筆者はこれをもっと重大な変化と見る中村の論［中村 1997:159-160］に賛成である。このマヤ地域の動乱の波及とみられる現象は各地で報告されている。マヤ地域の東のスーラ平原では、古典期終末期に平地の遺跡が放棄され、ヘンダーソンはこれをマヤ地域の動乱が及んだ結果と考える［Henderson 1988:21］。この時代高地に築かれたセロ・パレンケ遺跡(Cerro Palenque)のみは居住を継続する［Joyce 1986］。ホンデュラス中部のコマヤグア盆地ではミクロなセトゥルメント・パターンには広場の形成というメソアメリカ的な要素が混入するようになり、マクロなセトゥルメント・パターンとしてはテナンプーア遺跡(Tenampua)に、高地の要塞集落が営まれ、戦乱が広まっていたことを示唆している［Agurcia 1986］。

グァテマラ高地でもAD800年頃からは、セトゥルメント・パターンに顕著な変化が見られはじめ、平地の遺跡は放棄され、後古典期前期になると遺跡の立地は防御に有利な山頂に移る。高地の文献は外来者の征服があったことを述べており、これらの侵入者はその名前から判断してユカタンを征服を完了したプトゥン・マヤの第二波だったのではないかと考えられている［Sharer 1994: 426］。

伝承でチョロテガの原故郷とされるチアパス太平洋岸に近隣したマヤ南部の太平洋岸でも、メキシコ化した集団の侵入があったと考えられる証拠がある。コツマルワパ様式と呼ばれる石彫などがそれである。コツマルワパの年代にかんしては古典期中頃のテオティワカンの勢力拡張によるものであるという説もあり、いまだ結論をみていないが、現時点では古典期終末期とする意見が優勢な

ようである［Sharer 1994: 425-426］。

近年はじめて考古学調査が行われたニカラグア北部セゴビア地方(Las Segovias:図１)でも、河川流域の遺跡とその近辺の高地の遺跡が対をなすように分布していることが確かめられた［Espinoza, Fletcher, and Salgado 1996］。筆者も1997年にこれらのうちいくつかの遺跡を訪れたが、小高い山の山頂や尾根に、石のマウンドが築かれており、マウンド群をつなぐ石畳や貯水のためと思われる岩盤を掘り込んだ穴があり、戦乱を避けるための高地性居住地と見てもおかしくない。残念ながら高地の遺跡については未だその年代がわかっていない。河川沿いの遺跡では、カサ・ブランカ期(AD600-800)までの土器編年しか確立されていないが、この時期を過ぎる可能性のあるものとしてはディリリオ・レッド・オン・ホワイトというエルサルバドルのケレパ遺跡(Quelepa)で同定された土器(AD625-1000)が少量出土するのみである。

ニカラグア中部内陸部のチョンタレス地方(Chontales:図１)では、1980年代後半に初の組織的な考古学調査が行われた［Gorin 1990; Espinoza y Rigat 1994］。ゴランによると、800年代には前時代の遺跡が放棄されるものの、居住が続く遺跡も少なくとも２つある。またローカル・タイプの土器も前時代から連続性がある。ただしこの時期、装飾土器の大半を太平洋岸のニコヤ文化圏から搬入されたと思われる土器が占める点に変化が見られる。ゴランはこれをもってAD800以降「チョンタレスはニコヤ文化圏の周辺地域に組み込まれたという考えに傾く」と述べる。土器にかんしてはメソアメリカの浸透力が強まったとのべる一方、ゴランはチョロテガの移住がチョンタレスに及んだかどうかについては、「この時期の埋葬様式についてのデータが欠如しているため」慎重に結論を保留している［Gorin 1990:666］。なお筆者は1998年に同地域で調査を行い、ゴランらが２つの遺跡を記録するにとどまった、マウンドを持つ山頂遺跡、あるいは高地性の遺跡をさらに５つ確認した［Hasegawa 1998］。うち３遺跡では土器片を回収したが、年代は特定できていない。

年代が明らかでないセゴビア地方とチョンタレスの山頂遺跡、高地性の遺跡を別にすれば、上記の一連の出来事はその同時代性からして、相互に関連しあっていると考えるのが妥当であろう。チョロテガの移住という出来事もメソアメリカの動乱というコンテクストの中で考えなければならない。

(２)モラ・ポリクロームとパパガヨ・ポリクローム

ところで、バガセス期の終わりとサポア期の始まりをAD800とすると、チョロテガの移住とニカラグアにおける変化が、マヤ地域やホンデュラス中西部の混乱やトルテカの台頭よりもかなり先に起こったことになる。従来古典期マヤは800年代にはいり急激に衰退したと考えられてきたが、そのプロセスはもっと緩やかなものであったというのが現在の定説である。トルテカに関しては、メキシコ盆地のテオティワカン崩壊の後を襲った中小センターが放棄され、トゥーラが覇権を確立するのがAD800-900、最盛期のトラン期はAD950-1150とされる［青山・猪俣 1997:185］。S.サルガードはグラナダにおけるセトゥルメント・パターンの変化と新しい土器タイプの始まりを、サポア期に入って150年後、つまりAD950年頃としている。この年代観は放射性炭素年代測定によって裏打ちされている。S．サルガードは当然、グラナダにおけるこれらの変化をメソアメリカの動乱と関連付ける。もしもマナグア湖畔におけるセトゥルメント・パターンの変化と新しい土器タイプの始まりの年代をAD950年まで引き下げれば上記のデータと整合性を持つ。ところでサポア期とはいったい何によって規定されているのだろうか。

バガセス期とサポア期の境目の年代を決めているのはモラ・ポリクローム(図５)とパパガヨ・ポリ

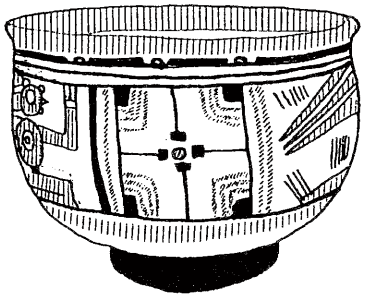

図5　モラ・ポリクローム
[Clifford 1985, p.112 の写真より作成]

図6　パパガヨ・ポリクローム
[Clifford 1985, p.146 の写真より作成]

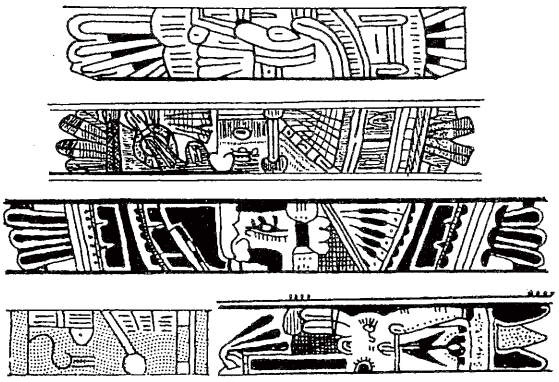

図7　ニコヤ・ポリクロームにみられる
羽毛をもった蛇のモチーフ
[Lothrop 1926, Plate L より（一部）]

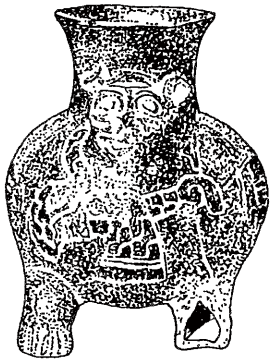

図8　トヒル・プランベート
[Sharer 1994, Fig.15.25 より作成]

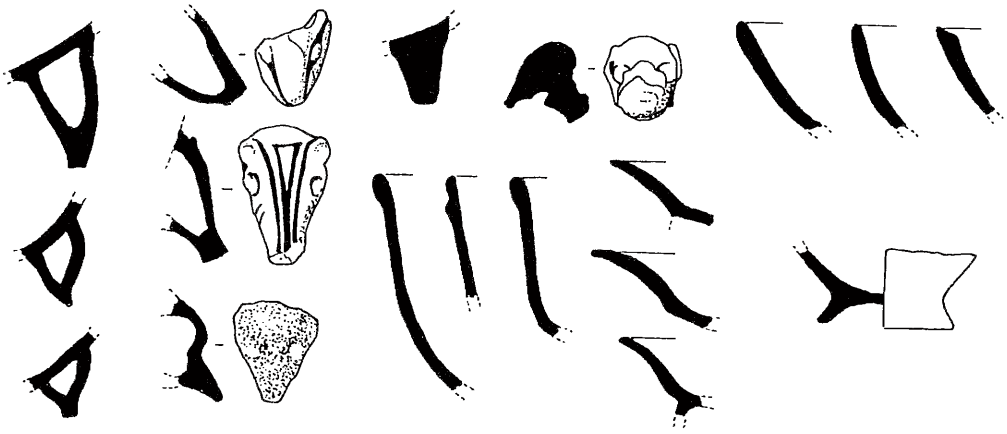

図9　パパガヨ・ポリクローム、クレブラ・バラエティー
[Healy 1980, p.165, 166]

クローム(図４ d､e､f、図６)の出現である。ロスロップがこれら土器の装飾モチーフに古典期マヤの要素が現れることを指摘し(図７)、ボデーとコウは器形・装飾モチーフの関連からこれをペテン低地のマヤ古典期後期最後の土器フェーズであるテペウ３期に起源を持つとみなした［Baudez and Coe 1962］。ところが、メソアメリカにおいて、これらのうちパパガヨ・ポリクロームの出土コンテクストをみると、コパン(Copán)［Longyear 1952:43］、グァテマラ高地のサクレウ(Zaculeu)［Woodbury and Trik 1953:194-195］、エル・サルバドルのセロ・デル・サポテ(Cerro del Zapote)［cited in Baudez and Coe 1962］、トゥーラ［Diel et.al. 1974］の４例あるうちの全ての場合において、トヒル・プランベート(図８)と呼ばれる後古典期前期の土器と共伴している。また器形はシルホ・ファイン・オレンジと呼ばれるこれもトルテカと関連付けられる土器と共通性を持つ。1982年に行われた会議では、おそらくはこのような理由から、パパガヨ・ポリクロームの10のバラエティーのうち８つがAD1000-1350まで年代を引き下げられ、１つは暫定的にAD800-1000とされ、クレブラ・バラエティー(図９)のみが確実にAD800-1000とされた［Abel-Vidor et al 1990:177-218］。モラ・ポリクロームにかんして言えば、６つのバラエティーに分けられたうち、３つがAD800から、３つがAD1000から始まるとされた［Abel-Vidor et al 1990:151-177］。

モラ・ポリクロームは、そのほとんどがコスタリカで出土している。ニカラグアでも出土しないではないが、わずかな量である。本稿で取り上げた遺跡・地域では、１点の出土も報告されていない。パパガヨ・ポリクロームのクレブラ・バラエティーについては、マナグア湖畔のロス・プラセーレス遺跡から２点出土が報告されている。グラナダ地域では皆無、サン・マルコス市ではバリオ・ラ・クルス遺跡でやはり２点報告されている。つまり、ニカラグアにおいてサポア期のはじまりを規定するのは、パパガヨ・ポリクロームのクレブラ・バラエティーの出現のみである。実は、クレブラ・バラエティーにAD800-1000という年代を与える根拠は、非常にあいまいである。パパガヨ・ポリクロームのほとんどのバラエティーがAD1000まで開始年代を引き下げられる中で、クレブラのみがAD800として残ったのは、ヒーリーによるリバス地峡の２遺跡での層位的発掘とセリエーションの結果、これがパパガヨ・ポリクロームの他のバリエーションに先立って早い時期から現れることが証明されているからである[4]。ところがリバス地峡の２遺跡でのクレブラ・バラエティーの出現は、バガセス期(ヒーリーのいうサン・ロケ期:San Roque Phase、かつて言われてたEarly Polychrome Periodの前半でメソアメリカの古典期前期に並行)である。つまりAD800どころか、AD500まで遡ってしまう。これは厳密な層位的発掘に基づくデータであり否定できない。上述のような「パパガヨ・ポリクロームはメソアメリカの後古典期前期のトヒル・プランベートやファイン・オレンジに並行」という事実と、リバス地峡での発掘調査の結果の前後両方向から引っぱられて、折衷案的な形でクレブラ・バラエティーの年代がAD800-1000に落ち着いたようにみえる。しかし、これではヒーリーの発掘データを無視しているに等しい。白色スリップの土器がリバス地峡でAD500に既にはじまっており、パパガヨ・ポリクロームの後期のバラエティーがその発展形だとすると、ニカラグアにおけるサポア期の意味がなくなってしまうし、チョロテガの移住を証拠づける前提のひとつが崩れてしまう。このような問題が今日まで放置されているのは驚くべきことだと思う。

(３)サポア期の再定義

白色スリップの土器の起源がリバス地峡にあるとしても、セトゥルメント・パターンの変化、サカサ刷毛目文土器などの新しいモノクロームの出現、パパガヨ・ポリクロームの後期のバラエティー描かれるメソアメリカ的なモチーフ、ニカラグアからコスタリカ北西部の太平洋岸におけるメソアメ

リカ系の言語の分布、植民地期に採録された伝承、という移住を裏付ける事実は残る。だとすれば、サポア期というものを定義し直し、その年代を引き下げることによって、上記のような矛盾は解消すると思われる。おそらく次のようなことが起こったのではないかと推測する。

AD900年頃、詳しいプロセスやその移住ルートはわからないが、トルテカあるいはプトゥン・マヤの拡張によって圧迫され、古典期マヤの諸政体の衰退に乗じたチョロテガが南下し、ニカラグアに入った。かりに伝承のように、チョロテガが民族あげての移住を行ったとしても、ニカラグア太平洋岸からコスタリカ北西部に至るまでの広大な地域を一挙に占領するほどの人口と軍事力をもっていたかどうかは疑問である。チョロテガはまずマナグア盆地に侵入した。想像をたくましくすれば、伝承にあるようにチアパスの原住地では「山の方、内陸に住んでいた」チョロテガが、海岸平野よりもやや内陸に入ったマナグア湖畔を好んだのかもしれない。最初短期間は先住民の居住地を占領して、先住民を駆逐したか支配したかは別にして、そこで生活していた。この時代の土器はパパガヨ・ポリクロームのクレブラ・バラエティーをはじめとする在地の土器である。クレブラ・バラエティーは、白色スリップ、赤と黒の施文という点ではまさにパパガヨ・ポリクロームであるが、他のバラエティーと異なり、装飾モチーフ、器形ともメソアメリカ的なものはない。白色スリップの技法は、チョロテガが持ち込んだものではなく在地のものであり、やがてこの白色スリップの上にメソアメリカ的なモチーフを描くという融合が起こる。器形もファイン・オレンジやトヒル・プランベートに酷似したものが登場する。これらの土器(パパガヨ・ポリクロームの後期のバラエティー)の出現をもって、サポア期を規定するべきであるというのが筆者の主張である。サポア期の始まりはAD950年、ニカラグアに侵入したチョロテガが勢力基盤を確立し、マナグア湖畔においてはＵＮＩ遺跡、ロス・プラセーレス遺跡に新しいセンターを建設し、グラナダ地方にも進出した年代である。パパガヨ・ポリクロームの後期バラエティーは、AD1000に開始されるとされているが［Abel-Vidor et.al. 1990］、トルテカ系の土器であるプランベートやファイン・オレンジとの共伴関係、様式的類似から、これをトルテカ最盛期の始まるAD950まで引き上げることは問題無いと考える。ティコモ遺跡にみられる集石遺構は、この居住地が放棄されるにあたって、ある種の儀礼的な行動が行われた跡とも考えられる。前述のようにロス・プラセーレス遺跡でも、同じように凝灰岩層を掘り込んだ跡がみられる。この遺跡ではパパガヨ・ポリクロームのクレブラ・バラエティーが出土していることから、バガセス期から細々と人間活動の痕跡があったことがわかる。サポア期に入って、新しい居住地の建設に先立ち、それまでの居住に儀礼的な意味で終わりを告げるために凝灰岩層が掘られたのではないか。何らかの埋納品があったとすれば現在は残っていない有機質のものであったろう。

コスタリカ北西部では、ニカラグア太平洋岸に比べてバガセス期からサポア期への移行が緩慢であることが以前から指摘されている。ゲレロらは、従来バガセス期とされていた２つの土器タイプ(ベレン刻文土器とカブヤル・ポリクローム)がAD800以降にも出土すること、サポア期のコンテクストから出た炭素の年代測定値にAD900を溯るものがないことから、結論は保留しているが、やはりサポア期の開始年代を引き下げるべきではないかという考えを提示している［Guerrero et.al.1994:96］。これもやはり、チョロテガがまずマナグア湖畔周辺で勢力を確立し、後にコスタリカ北西部まで進出したという移住のプロセスを物語っているように思える。

７．結論

以上まとめると、１)歴史資料にあるチョロテガの移住の伝承は史実を反映する。２)その年代は従来言われていたAD800ではなくて、AD900以後である。３)この移住は同時代のメソアメリカの状

況と深く関連している。4)この移住の結果起こったセトゥルメント・パターンと土器の変化をもってサポア期の開始とするべきであり、その年代はAD950である。

最後に、これまで触れなかったエル・サルバドルの状況について述べる。最も集中的な発掘がなされた2遺跡をとり上げる(図1)。エル・サルバドル西部のチャルチュアパ(Chalchuapa)では、本稿でチョロテガの移住の年代と結論づけたAD900前後には目立った変化はない。古典期から後古典期への移行(ca.AD 1000)は、セトゥルメント・パターン、土器ともに、急激な変化は見られない。後古典期前期に入り、建築と土器、石器にメキシコ的な要素が現れ、シャーラーはこれをナワ語族のピピルのメソアメリカ東南辺境への進出と関連づけるが、移住という言葉の使用は避けている［Sharer 1978:211］。

エル・サルバドル東部のケレバでも、チョロテガの存在を示すような証拠はない。この遺跡ではAD650頃(レパ期: Lepa Phaseの開始時期)に、土器その他の遺物、建造物配置に劇的な変化が現れており、アンドリュースはこれをこれをメキシコ湾岸の集団との接触と考え、「北の集団の侵入」の可能性を示唆している。この遺跡で居住が断絶するのはAD1000である［Andrews 1977］。

もしチョロテガがチアパスから太平洋岸をとおってニカラグアに移住したとするならば、彼らがエル・サルバドルにその痕跡を残していないということは興味深い事実である。このことは移住のルート、移住した集団の規模、移住ルート沿いの社会との接触の形態など、移住のプロセスとメカニズムを知る上で、重要な示唆を与えてくれると思われる。また、ハバーランドによれば、「エル・サルバドルで10の遺跡で土器のサンプリングを行えば、少なくとも5つの異なった土器コンプレックスを見ることができるし、10の異なった土器コンプレックスが現れても驚くに値しない」［Haberland 1960:21］といわれるほど遺跡間の多様性があり、未調査の遺跡でチョロテガの移住の痕跡が見つかることもありうると考える。

繰り返しになるが、本稿ではチョロテガの移住について巨視的な目でメソアメリカの動きも考慮に入れつつその実態を解明するべきという主張を行ってきた。しかし、メソアメリカの動乱とチョロテガの痕跡がニカラグアに現れる年代が同時期であることをもって、それらの間に因果関係があるという、やや論理的に強引な推論の仕方をしたことは認めざるをえない。なぜ移住が起こったか、メソアメリカでの出来事との因果関係とはいかなるものか、という問いには、セトゥルメント・パターン研究による各地域の人口動態や生態環境との絡みでの人口圧の推定、資源利用の問題などの面からも答えが用意されていくだろう。しかし、本稿で見たパパガヨ・ポリクロームとサポア期の年代決定の問題のように、もっと基本的な作業の不足が見過ごされたままになってはならないと思う。歴史事象が「なぜ」、「どのように」起こったかを問うことが重要であるのは言うまでもない。しかし、その前提となるのは「いつ」、「どこで」、「何が」起こったかを明らかにすることである。中央アメリカ南部の考古学で各地域の土器編年を整備し、それらをつなげて広域編年網を確立する作業がおろそかになってはならない。本稿で紹介した、ニカラグア内陸部や北部などほとんど集中的な発掘が行われていない地域、またエル・サルバドルやホンデュラス中部から東部の調査の空白地域を埋めてゆく作業も必要であろう。

【謝辞】

本研究ノートの出発点となっているティコモ遺跡の発掘調査は、平成9年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)、国際交流基金支給の現地活動費、マナグア市支給のプロジェクト資金により行われた。またニカラグア滞在中、在ニカラグア日本大使館の皆さんから公私にわたり多大な援助をいただいた。感謝の意を表したい。

註

1）この凝灰岩層はマナグア湖周辺に広く見られる。どの火山の噴出灰であるかは特定されていない。年代も特定されていないが、凝灰岩層より下からは遺物の出土はまれで、300BCより新しい土器は出土していない。

2）マナグア湖畔の遺跡は遺物包含層が薄く、しかも、いかなる理由によってかは不明であるが、ほぼ例外なく各時期の土器が混じって出土し、層位的データは有用性を持たない。また、遺構が検出されることも少ない。よって現在のところ、問題はあるが、層位は無視して各遺跡の出土土器のうち年代を与えられたものを取りだして、その総量を比較する以上に有効な手段はないと考える。

3）プリズマティック・ブレードの製作技法は、メソアメリカ的な要素であり、バガセス期にはこの技法はニコヤ文化圏では行われておらず、サポア期に入りメソアメリカ系集団の移住によりもたらされたと考えられる［Braswell 1997:29］。

4）パパガヨ・ポリクロームのクレブラ・バラエティーはヒーリーのモノグラフ［Healy 1980］では、"Paloma Black and Red on White Polychrome"として記述されている。

引用文献

Abel-Vidor, S. et.al.

1990 Principales Tipos Cerámicos y Variedades de la Gran Nicoya. *Vínculos* 13,1-2:35-317 Museo Nacional de Costa Rica, San José.

Adams, W.Y., D. P. Van Gerven and R..S. Levy

1978 The Retreat from Migrationism. *Annual Review of Anthropology* 7, pp.483-532.

Agurcia F.,R.

1986 Late Classic Settlements in the Comayagua Valley. In *The Southeast Maya Periphery*, edited by P.Urban and E.Schortman, pp.262-274. University of Texas Press, Austin.

穴沢咏光

1985 「『考古学』としての『人類学』(3)」『古代文化』37(6)：237-248

Andrews, E.W.,V

1977 The Southern Periphery of Mesoamerica: A View from Eastern El Salvador. In Social Process in Maya Prehistory, edited by N.Hammond, pp.113-134. Academic Press, New York.

青山和夫、猪俣健

1997『メソアメリカの考古学』同成社

Bargnesi, K., M. Dirksen, y K. Hartman

1996 Excavación en el Sitio N-MA-62(UNI). In *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 37-48, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Baudez, C. F. and M. D. Coe

1962 Archaeological Sequences in Northwestern Costa Rica. *Proceedings of 34th International Congress*

of Americanists 1, pp. 367-373, Wien.

Braswell,G.E.

1997 El intercambio comercial entre los pueblos prehispánicos de Mesoamérica y la Gran Nicoya. *Revista de la Universidad del Valle de Guatemala,* No.7, pp. 17-29.

Brown, M., M. Kreig, y C. Wilmot

1996 La Segunda Temporada en el Sitio Villa Tiscapa(N-MA-36). In *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 9-36, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Brown, M. L.

1995 Prospeccion y Rescate en Barrio La Cruz, San Marcos. In *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados. El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 71-74, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Childe, V. G.

1956 [1981] *Piecing Togather the Past: The Interpretation of Archaeological Data.* Rooutledge & Kegan Paul, London.(『考古学の方法』近藤義郎訳：河出書房新社)

Clifford, P.

1985 Catalog Entry. In *Art of Costa Rica: Precolumbian Painted and Sculpted Ceramics from Arthur M.Sackler Collections*, edited by Lois Katz.

Coe, Michael D.

1960 Archaeological Linkages with North and South America at La Victoria, Guatemala. *American Anthropologist* 62, pp. 363-393.

Cooke, R. G. and A. J. Ranere

1992 The Origins of Wealth and Hierarchy in the Central Region of Panama (12,000-2,000BP), with Observations on Its Relevance to the History and Phylogeny of Chibchan-Speaking People in Panama and Elsewhere. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, edited by F. W. Lange, pp.243-316, Dumberton Oaks Reserch Library and Collection, Washington D.C.

Diel, R. et.al.

1974 Toltec Trade with Central America. *Archaeology* 26(3): 182-187

Esgueva G., A.

1996 *La Mesoamérica Nicaraguense: Documentos y Comentarios.* Universidad Centroamericana, Managua.

Espinoza P., E.

1995 La Cerámica Temprana de Managua y Sus Vínculos Regionales. In *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados. El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 17-24, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Espinoza P., E., L. Fletcher y R. Salgado G.

1996 *Arqueología de Las Segovias: Una Secuencia Cultural Preliminar.* Instituto Nicaragüense de Cultura, Organización de los Estados Americanos, Managua.

Espinoza, P., E y D. Rigat

1994 Gran Nicoya y la Región de Chontales, Nicaragua. *Vínculos* 18, 19, pp. 139-156, Museo Nacional de Costa Rica, San José.

González R., R.

1995 La Secuencia Cerámica del Sondeo #4, Sitio Huellas de Acahualinca(N-MA-61). In *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados. El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 27-36, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Gorin, F.

1990 Archaeologie de Chontales, Nicaragua. Thèse de Nouveau Doctorat prèsentèe devant l'Université de Paris I.

Guerrero M., J. V., F. Solis D. y R. Vásquez L.

1994 El Periodo Bagaces(300-800d.C.) en la Cronología Arqueológica del Noroeste de Costa Rica. *Vínculos* 18,19, pp. 91-120, Museo Nacional de Costa Rica, San José.

Haberland, W.

1960 Ceramic Sequence in El Salvador. *American Antiquity* 26, pp. 21-29.

長谷川悦夫

1996 『中央アメリカ南部における先コロンブス期文化の展開』、東京大学大学院総合文化研究科修士論文

Hasegawa, E.

1998 Informe del Proyecto Arqueológico Chontales II. Manuscrito presentado para la Dirección de Patrimonio Cultural, Instituto Nicaragüense de Cultura.

Healy, P. F.

1980 *Archaeology of the Rivas Region, Nicaragua.* Wilfred Laurier University Press, Ontario, Canada.

Henderson, J. S.

1988 Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Sula. *Yaxkin* XI(1), pp. 5-30.

Joyce, R. A.

1986 Terminal Classic Interaction on the Southeastern Maya Periphery. *American Antiquity* 51(2), pp. 313-329.

Keller, C., C. Lawson, y R. Sievers

1996 Excavaciones en Ciudad Sandino(N-MA-37). In *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 85-98, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Lange, F. W., ed.

1992a *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area.* Dumberton Oaks Reserch Library and Collection, Washington D.C.

1995 *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados, El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*. Alcaldía de Managua, Nicaragua.

1996 *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona*

Metropolitana de Managua", Alcaldia de Managua, Nicaragua.

Lange, F. W.

1992b Summary: Perspectives on Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, edited by F. W. Lange, pp. 423-443, Dumberton Oaks Reserch Library and Collection, Washington D.C.

Lathrap, D. W.

1977 Our Father Cayman, Our Mother the Gourd: Spinden Revisited, or a Unitary Model for the Emergence of Agriculture in the New World. In *Origins of Agriculture*, edited by C. Reed, pp. 713-752, Mouton Publishers.

Longyear III, J. M.

1952 *Copan Ceramics: A study of southeastern Maya pottery*. Carnegie Institution of Washington, Publication 597.

Lothrop, S. K.

1926 *Pottery of Costa Rica and Nicaragua*. 2 vols. Museum of American Indian, Heye Foundation, Contribution 8.

中村誠一

1997 「南東地域からみた古典期マヤ文明の崩壊」、『ラテンアメリカ研究年報』17、 pp.157-186

Pichardo P., L. y J. Zambrana F.

1995 Prospección y Excavación Arqueológica, Sitio N-MA-62 UNI, Managua. In *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados. El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua*", edited by F. W. Lange, pp. 75-81, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Piperata, B. A.

1995 La Prospección del Sitio San José Robleto, San Marcos, Carazo, Nicaragua. In *Descubriendo Las Huellas de Nuestro Antepasados. El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua*", edited by F. W. Lange, pp. 61-70, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Salgado G., S.

1996 Social Change in a Region of Granada, Pacific Nicaragua. Ph.D. Dissertation. State University of New York.

Sharer, R. J.

1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador, Vol.3, Pottery and Conclusion*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

1994 *The Ancient Maya*. 5th edition. Stanford University Press, Stanford, California.

Squire, E. G.

1860[1989] *Nicaragua: Its People, Scenary, Monuments and the Proposed Interoceanic Canal*. D.Appleton & Co., New York. (*Nicaragua: sus gente y paisajes*. traducido por L. Cuadra, Nueva Nicaragua Editorial, Managua.)

Stauber, D. M.

1996 Excavaciones Arqueológicas e Investigaciones Preliminares en el Sitio Los Placeres , (N-MA-1).

In *Abundante Cooperación Vecinal: La Segunda Temporada del Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, edited by F. W. Lange, pp. 49-68, Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Stone, Doris

1972 *Precolombian-Man Finds Central America.* Peabody Museum Press.

Woodbury, R. B., and A. S. Trik

1953 *The Ruins of Zaculeu, Guatemala.* William Byrd Press, Richmond.